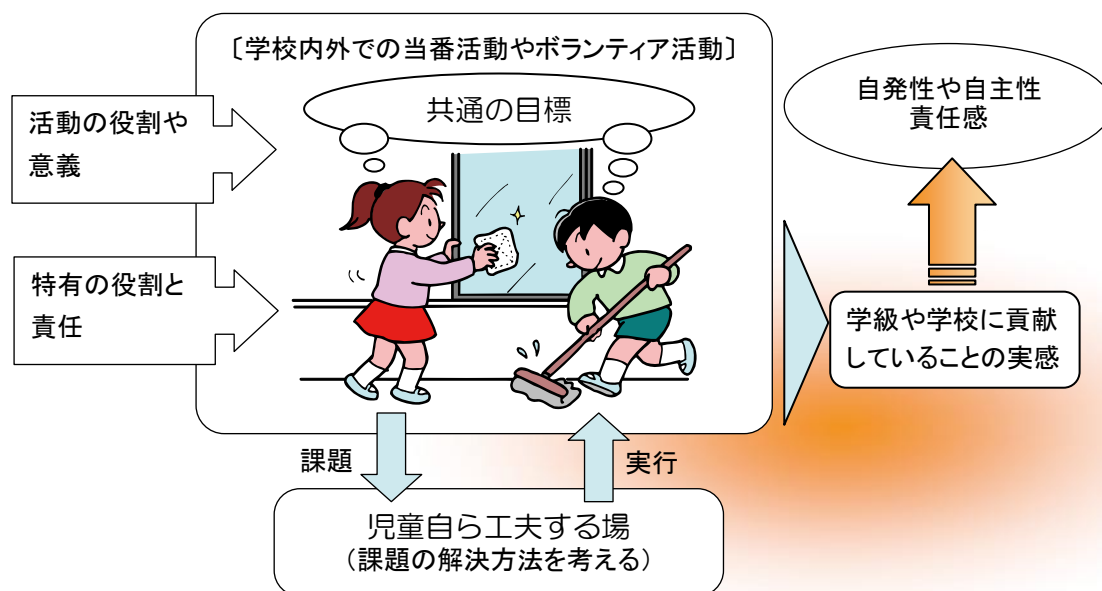


1 一人一人に特有の役割と責任を与える

日々の学級や学校生活において、児童は、清掃や給食、日直、飼育、栽培等の当番活動や学級内の仕事に取り組んでいます。また、多くの学校では、学校内外での児童によるボランティア活動も実践されています。

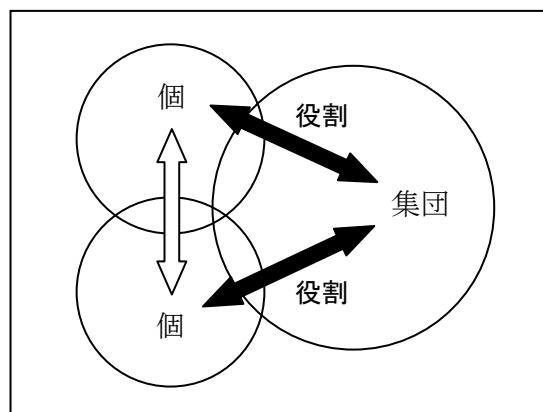
これらの活動において、児童一人一人に特有の役割と責任を与えたり児童自身が工夫する場面を設けたりすることで、より一層、児童の自発性や自主性をはぐくむとともに、責任感を持たせることができます。

その際、児童が活動の役割や意義等を十分に理解できるようにするとともに、学級や学校に貢献していることが実感できるように指導することが大切です。



児童一人一人の役割づくりを行うに当たっては、まず、教職員が集団と個の関係をしっかりと踏まえ、双方への指導と支援を充実させていかなければなりません。

楽しく豊かな生活を送るためには全校生あるいは学級の友達が集団として共通の目標や願いを持っていること、そして、その達成のために、一人一人が役割を分担し合い責任を果たし合うことが大切であること、すなわち右図のように、個と集団はそれぞれの役割を介して結び付いていることを児童に理解させることが大切です。そうすることで、児童は与えられた役割をきちんと果たす自分の価値に気付き、集団の中で役立っているという実感を持つことができます。



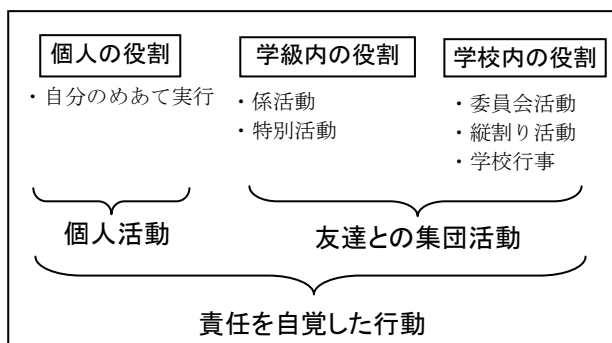
【具体的な実践事例】

- 児童が自分たちで組織をつくり役割分担し合うような場を設定するなどの工夫をする
- 縦割り班（異年齢集団）を編成し、各学年の児童としての役割と責任を与える
- あいさつ運動など自発的に役割を担い集団に貢献できる場をつくる
- 共通の課題解決に向け、一人一人が役割をもって追究する学習展開を工夫する

実践事例①：個人活動から集団活動へ

ある学校では、児童の責任を自覚した行動を個人活動と集団活動に着目して捉えています。

そして、児童が集団活動を通して友達とよりよくかかわり自己存在感を高めるためには、まず個人活動で責任を自覚した行動をとる場面を設定し、経験や自信を持たせることが大切だと考えています。



◆個人活動

めあてを持って実践し、実践後には評価して次の活動につなぐといったPDCAサイクルを重視しています。自己評価に加え教職員も評価することで、責任を持ち行動できた児童が自信を深められるようにしています。

◆集団活動

委員会活動…全校児童の生活と密接な関係を持ちながら、学校における共同生活の充実に役立つ仕事を各委員会が分担し、児童が主体となって計画・立案して継続的に活動を行います。その活動の中で相互の交流を深めながら、集団としての連帯感や集団の一員としての自己を育成する態度を養っています。

縦割り活動…縦割り班で清掃を行います。作業を分担し、協力して働くことを通して、充実感や有用感を高めます。また、清掃班長会を行っており、自分のグループに任されたエリアに責任を持って取り組む中でリーダーシップがはぐくまれています。



あいさつ当番の仕事



清掃班長会の様子

効果を上げるためのチェックポイント

○ 児童の役割意識を高める

児童が自分の役割に取り組む前や取り組んでいる過程では、それぞれの役割がどのように価値のあるものかを確認め合う場を設けたり教師が助言したりすることが大切です。単に役割が割り振られ、児童が「言われた仕事だからしている。しないと叱られる。」という受け止め方に陥らないようにしたいものです。

○ 振り返る場を工夫する

取り組み後には、振り返りの場を設けます。できたかどうかだけでなく、自発的な創意工夫や友達との協力等の視点を持って取組状況を振り返ることが大切です。また、その役割を果たす人のおかげでいかに集団が成長したり助けられたりしているかを伝えたいものです。

2 その子のよさが発揮できる場をつくり、承認・賞賛する

全国学力・学習状況調査の質問紙調査で、「自分にはよいところがあると思いますか」という質問に「当てはまる」と回答した児童の割合は、児童全体の1/3に留まっています。学校生活の中に、児童一人一人が長所を発揮したり伸びやがんばりを実感したりできる場を設け、よさの自覚や自己肯定感の高まりに結び付けることが大切です。その際、よさに気付いた教職員や周りの友達から承認・賞賛されると一層効果的です。

【具体的な実践事例】

- 友達のよさを発表したり、カードに記入して渡したりし合う場を設ける
- 児童や学級の特技やがんばりを披露し合う集会等を開催する
- 児童のよさや活躍を賞賛するコーナーを設けるなど学校や学級の掲示を工夫する

実践事例①：学校の自慢づくりを通して自信を持たせる

◆個人カルテの作成

課題を抱えている児童について個人カルテを作成し、児童の様子を継続的に記入しています。定期的な生徒指導委員会では、それぞれの児童に全職員がどのように支援していくかを話し合い、共通理解を図っています。

◆学校の自慢づくりの取組

詩の暗誦、逆上がりなどの課題を児童個々・学級に与え、不得意な児童にも学級で励まし合って取り組ませることで、達成したときの充実感を学級全員に味わわせています。その際、教員は、課題を抱えている児童に個別指導をしたりクラスで支えたりすることで、自尊感情を高めようとしています。

また、清掃時においても考える力を付けるために「しゃべらずに清掃をする」という目標を掲げ、粘り強く指導と評価を継続することで、無言で清掃できるようになっています。

このような実践が、学校の自慢となり、児童一人一人が自信を持って学習や諸活動に取り組むことができるようになってきています。



昼休みに逆上がりの練習をする児童

実践事例②：全体の場で表彰し自信を持たせる

◆教員による推薦

全教職員で推薦の基準を共通理解した上で、児童の善行を見つけ、カードに善行の内容と教員からのメッセージを書き込み、担当教員に提出しています。

◆全校集会での表彰

全校集会で「よい子の表彰」として、児童の善行を紹介し、全校生の前で表彰します。児童の長所、努力や善行を認め合う場となり、児童の自信につながっています。



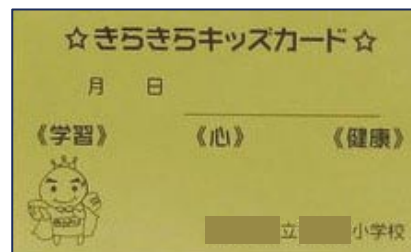
善行の紹介カードの掲示

実践事例③：評価カードを活用して承認・賞賛の機会を増やす

◆「きらきらキッズカード」の作成と実践

清掃やあいさつ、学習等において、積極的に児童のよさやがんばりを賞賛することで自尊感情を育成することを目的として、学習、心、健康の観点で賞賛する下のような評価カードを作成しています。

全教職員で児童のよさを見つけ、カードにコメントを書いて児童に手渡していきます。児童は教師からの承認を通して、どのような考えや行動が大切かを学びます。また、教師は児童がどんな観点でカードをもらったか、毎日記録していくことで、児童の状況を把握し、個別の支援に生かすことができます。



さらに、帰りの会における一日の振り返りの場では、教師だけでなく、他の児童の意見も取り入れながら、多面的に児童を評価、賞賛することで、意欲化を図っています。

◆「きらきらキッズカード」の効果の分析

児童への意識調査や、教師の配布枚数と賞賛の観点の調査を行ったところ、意識調査の結果からは、カードをもらえるように努力していると答えた児童が多く、相手の気持ちを考えて進んで行動しようという意識の高まりにつながっていることが伺われました。また、教師の配布枚数と賞賛の観点の調査結果からは、高学年になるにつれ、配布枚数が多くなること、賞賛の観点を見ると生活面より学力や態度面の占める割合が大きくなることなどが分かりました。

◆「きらきらキッズカード」の改善

2年次からは、社会性に関わる「あいさつ」と「清掃」のイラスト版カードを新しく作成して取り組んでいます。取組の焦点化により、清掃用具を上手に使ったり、隅々まで清掃したりするなどの質の高まりが見られるようになってきています。



あいさつ



清掃

効果を上げるためのチェックポイント

○ 教職員が児童を承認・賞賛する視点を多様を持つ

教職員が児童のよさを積極的に承認・賞賛できるようにするためには、児童の取組状況を観察している教職員が多様な視点を持つておくことが大切です。例えば、運動会においても、競争種目の結果だけでなく、「自分の役割や責任を果たしている」「練習したことを生かして演技している」「プログラムの進行を意識して行動している」「見学のルールやマナーを守っている」など多様な視点があります。こうした視点を教職員が事前に確かめ合っておくと、児童を見る目も豊かになり、効果的な指導に結び付きます。

○ 承認・賞賛の機会を増やす

児童の活動が承認・賞賛される機会を増やすことは、児童が活動の価値を見出し、自己肯定感を高めるのに効果的です。

そのためには、例えば「学校だより」や「学年だより」等で家庭や地域に積極的に発信したり、活動の場を校内にとどまらず地域に広げそれぞれの立場から承認・賞賛してくれる人と触れ合う機会を増やしたりするなどの工夫が考えられます。